

Toyota Municipal Museum of Art Press Release

豊田市美術館 プレスリリース

2024.7.4



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館



dot architects + contact Gonzo 《GDP (Gonzo dot party)》アートエリア B1 2020 年
(参考図版)

しないでおく、こと。
—芸術と生のアナキズム

Potential not to be and not to do;
Anarchism as alternative art and other ways of life

2024年10月12日[土]—2025年2月16日[日]

開館時間： 午前10時-午後5時30分(入場は午後5時まで)

休館日： 月曜日(10月14日、11月4日は開館)、年末年始2024年12月28日[土]-2025年1月17日[金]

主催： 豊田市美術館

協力： Galerie Molitor

会場： 展示室8 ほか

観覧料：

	一 般	高校・大学生	中学生以下
当日窓口販売	1,500 円	1,100 円	無 料
オンライン販売	1,300 円	900 円	

*前売券及び20名以上の団体は当日窓口販売料金から200円割引

*前売券販売所、その他観覧料の減免や割引等については、当館ウェブサイトをご確認ください。

お得なセット券を販売します(オンライン限定)

2025年1月18日から開催する玉山拓郎展(仮)と会期が重なる時期に使用できるセット券です。

一般2,500円、高校・大学生1,700円

*販売期間：2024年9月14日[土]—2025年2月16日[日]

*有効期間：2025年1月18日[土]—2月16日[日]

開催趣旨

芸術＝創造とはそもそも、いまだ了解されない認識や知覚の領野を拡張していく営みです。ゆえに芸術とは、「芸術」として名づけられ、一つに回収されてしまうことへの抵抗をあらかじめ含んでいます。このことは、未知未踏の領野を取り込み制度化することで国土や資本を拡張してきた近代以降の思考自体への抵抗になぞらえることもできるでしょう。この制度化され、統治されることへの抵抗・逃走の姿勢＝アナキズムに芸術の本来の力を認め、その可能性を問うことは、硬直化した社会そのものを突破する契機にもなるのではないのでしょうか。

近年、芸術を含むあらゆる場で、旧来の制度や差別への連帯闘争が試みられています。それらは切実な抵抗の態度であり、私たちを鼓舞する重大な拠り所となるものの、ゆえにこそ小さな個別の差異を均してしまう危うさと隣り合わせにあるものともいえます。このギリギリの状況において、私たちの個々の表現や日常的な振る舞いは、いかに一つに回収されることなく共存し、それでも抵抗の力を持ち続けることができるのでしょうか。そのそれぞれの試みがアナキズムの実践だといえます。

19 世紀末、近代化と背中合わせに気運の高まったアナキズム運動に共感した新印象主義の画家たち。第一次世界大戦と前後して、社会の中心から逃れ、スイスのモンテ・ヴェリタに集った芸術家を含む様々な思想の持ち主たち。第二次世界大戦後、急進する資本主義体制をかいぐり日常の革命を試みたシチュアシオニスト・インターナショナルとその重要メンバーのアスガー・ヨルン。ソ連時代から現在まで、野外や自室で非公式芸術としてのアクションを展開し続けるロシア集団行為。さらに自宅での制作と自主展覧会の運営を実践したマルガレーテ・ラスペや共同スタジオを運営するコーポ北加賀屋 (adanda+contact Gonzo+dot architects+remo + FabLab Kitakagaya+102 木工所 +REUNION STUDIO) の面々、アーティスト集団のオル太^たや、生活も制作も発表もそれらの場所も、全てを自在に往来し続ける大木裕之^{ひろゆき}。

本展では、芸術と社会にどっぷりと関わりながらも軽やかに抵抗・逃走し、あえて「しないでおく」ことの可能性も含めて生き、創造する人々の実践を紹介します。

展示点数

約 100 点

展示構成

1) 新印象主義とアナキズム

アナキズムと美術との関わりを示す重要な出発点として、アナキズム運動が本格化した19世紀末にその思想に深くコミットした新印象主義の作家たち、カミーユ・ピサロ、ポール・シニャック、ジョルジュ・スーラの作品を紹介します。絵の具の混色を避け、全て



の色彩を等しい単位で配置することで画面の均衡を図った新印象主義の作家たち。彼らの方法論自体に、個々人の自由とその「調和」によるユートピア社会の実現をうたったアナキズム思想との親和性を見出します。

ポール・シニャック 《サン＝トロペ、グリモーの古城》1899年
静岡県立美術館蔵

2) モンテ・ヴェリタのユートピア

スイス、アスコナの地に見出された「モンテ・ヴェリタ（真理の山）」は、19世紀末以降、産業化の進展する都市生活を逃れ、アナキストや菜食主義者らが集い、コミュニティを形成した場所です。第一次世界大戦と前後する頃には、「ノイエ・タンツ」の理論的創



始者であるルドルフ・フォン・ラバンが同地で舞踊学校を主宰し、ハンス&ゾフィー・トイバー＝アルプ夫妻やフーゴ・バルラダダイストが集い、さらにヴァルター・グロピウスやラースロー・モホイ＝ナジらバウハウスの作家たちが訪れるなど、芸術家たちにとっても、ユートピア的な地となりました。本章では、同地の歴史的展開を資料と作品により紹介します。

ラースロー・モホイ＝ナジ 《アスコナのオスカー・シュレンマー》1926年
東京都写真美術館蔵

3) シチュアシオニスト・インターナショナルとアスガー・ヨルン

ギー・ドゥボール、アスガー・ヨルンらにより1957年に結成されたシチュアシオニスト・インターナショナルは、ますます強まる資本主義とブルジョワ主義に反旗を翻し、日常生活の革命、別の生、別の状況の構築を試みました。日常のうちで日常の変革を目論んだ彼らは、剽窃と引用、転用と漂流といった手法を用いながら、スペクタクル化した社会を批判し、都市生活を読み替えていきます。本章ではドゥボールとヨルンが協働で手



がけた *Fin de Copenhague*、*Memoire* や、蚤の市で入手した古い絵に加筆変更を加えるヨルンの「modifications」絵画などを通して、シチュアシオニストの実践を紹介します。

ギー・ドゥボール、アスガー・ヨルン 『メモワール (Memoire)』1957年
ヨルン美術館蔵

展示構成

4) ロシア集団行為

ソ連時代の 1976 年、アンドレイ・モナストイルスキーを中心に結成されたロシア集団行為は、ソ連崩壊後現在まで、モスクワ郊外や自室を舞台に、非公式芸術としてのアクションを様々に実行してきました。身近なアーティストを参加者・観察者として実践されるこれらのアクションでは、知覚・認知不可能とも思われる行為を音声や記述によって様々に記録し、議論し、それがまた次のアクションを構想・準備することにつながっていきました。40 年以上にわたる集団行為のアクションは、体制に与することなく、また正面から抵抗することなく、体制の外側で非公開、非公式に続けられた稀有な実践といえます。本章では、およそ 170 に及ぶアクションの中から象徴的ないくつかを取り



上げ、写真、映像、また訳出したテキストなどを通して会場で体感していただきます。また初期のアクションの重要な参加者の一人であったイリヤ・カバコフの作品もあわせて紹介します。

ロシア集団行為《絵画》1979 年

5) 制作と生活と展示

ドイツ、ベルリンを拠点に活動したマルガレーテ・ラスペは、初期にはキッチンを舞台に映像作品を制作し、日常の労働と作品の創造の境界に揺さぶりをかけました。彼女の自宅はまた、ウィーン・アクションイズムやフルクサスの作家たちが集い、作品について



語り合う親密な場所となり、自邸の庭園を会場にした自主企画展の運営など、体制の外側で延々と続けられた彼女の活動は、改めて注目すべきものです。

マルガレーテ・ラスペ
《明日も、明日も、そしてまた明日も、彼らをスイングさせよう》1974 年
Courtesy of the Galerie Molitor und Deutsche Kinemathek

大阪の北加賀屋にある「コーポ北加賀屋」は、建築家集団ドットアーキテツツ、アーティスト集団 Contact GONZO、NPO 法人記録と表現とメディアのための組織 remo やオル



タナティヴスペースを運営する adanda など、さまざまな分野の人や組織が集まる「もうひとつの社会を実践するための協働スタジオ」です。そこでは、それぞれが独自に、またときに共同しながら制作やイベント、実験を繰り広げており、水平的な関係のなかでルールを更新しながら場所作りの実践が試みられています。

コーポ北加賀屋 (adanda+contact Gonzo+dot architects+remo +
FabLab Kitagaya+102 木工所 +REUNION STUDIO)
photo: Yuma Harada

展示構成



オル太《超衆芸術スタンドプレー 夜明けから夜明けまで》
2020 年 photo: Kenji Agata

5 名の作家から成る芸術家集団オル太は、個々の活動が続けながら、一方で集団としてパフォーマンスや展示を試みてきました。ユーモアと毒をもって体制と大衆の関係と捻れを問いつけるその作品は、その根底に社会への抵抗の力を秘めています。



大木裕之「アブストラクト権化」展示風景 ANOMALY
東京 2024 年 撮影: 村田冬実 ©Hiroyuki Oki, Courtesy of ANOMALY

映画製作からスタートした大木裕之は、東京、高知、岡山、京都と複数の拠点をもち、移動しながら生活と制作と発表とを渾然一体として続けてきました。それは、場所や制度という枷をすり抜け、新たな状況を作ろうとする「ネオ・シチュアショニスト」の稀有な試みにほかなりません。

昨年亡くなったラスペのインスタレーション作品の再現を含む、コーポ北加賀屋、オル太、大木裕之による本展のために制作するインスタレーション作品を通して、作家たちのリアルな実践の一端を体感していただきます。

展覧会の見どころ 1) モンテ・ヴェリタの現在性

アナキストや菜食主義者、芸術家たちが集ったスイスのアスコナにあるモンテ・ヴェリタ。都市生活を逃れ、この地に吸い寄せられた人たちの思想や指向は、都市を離れ、生活の豊かさを見直そうという最近年のムーブメントの先駆けとして、共感を呼ぶものです。日本ではまとめて紹介されることのなかった同地を拠点にした活動について、いま改めて注目します。

2) アスガー・ヨルンの作品をまとめて紹介

デンマークを代表する作家アスガー・ヨルン。日本では、芸術家グループ「コブラ (CoBrA)」のメンバーとしてわずかに知られるばかりですが、シチュアシオニスト・インターナショナルの設立メンバーとして重要な役割を果たし、また体制に与することなく広範な活動を展開した魅力ある作家です。本展では、ヨルン美術館の協力のもと、11点の作品をまとめてご覧いただけます。

3) ロシアの集団行為を、日本の美術館展覧会において初紹介

1976年の結成以来、現在まで活動をつづけるロシアの集団行為。2011年にヴェネチア・ビエンナーレで取り上げられ、注目を浴びたものの、膨大なテキストを伴うアクションは、ロシア語という言語の壁もあり、日本ではほとんど紹介されてきませんでした。本展では、研究者の生熊源一^{いくまげんいち}氏の協力のもと、日本語訳テキストを用意し、集団行為の重要なアクションをご紹介します。

4) 再注目のマルガレーテ・ラスペ

ドイツ、ベルリンを拠点に制作・発表を続けたラスペ。家事労働と創造の間を行き来し、一方で、自宅を開放して多くの作家に場を提供し、またエコロジーの観点から制作に取り組むなど、注目すべき活動を独立して展開してきました。女性作家が見直される昨今、彼女の多面性は改めて紹介すべき魅力を持っています。

5) コーポ北加賀屋、オル太、大木裕之による新作

コーポ北加賀屋、オル太、大木裕之の3組の作家が本展にあわせて制作展示を行います。屋外など、展示室以外にも場所を見出しながら、美術館という制度を揺さぶるような豊かな創造を実践します。

関連イベント

講演会、展示室でのゲストトーク、パフォーマンス、担当学芸員によるギャラリートーク等を予定。詳細は、当館ウェブサイト、SNS等でお知らせいたします。

お問合せ

豊田市美術館 〒471-0034 愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1

HP:<https://www.museum.toyota.aichi.jp> e-mail:bijutsukan1@city.toyota.aichi.jp

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| ● 展覧会に関すること | 学芸担当：千葉、石田 | Tel 0565-34-3131 |
| ● 掲載依頼・取材等に関すること | 庶務担当：加藤、籠谷（こもりや） | Tel 0565-34-6748 |

「しないでおく、こと。-芸術と生のアナキズム」 広報用画像について

当館ウェブサイト「広報用画像ダウンロード」申込みフォームより、ご希望の画像を申請してください。
「広報用画像ダウンロード」の画像提供サービスは、パソコンでのみダウンロード可能となります。
パソコンからのお申し込みが難しい方は、以下を記入のうえ、Fax(0565-36-5103)でお送りください。



Toyota
Municipal
Museum
of Art

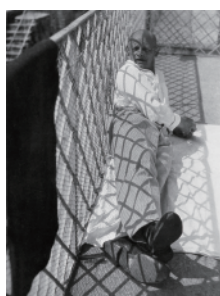
豊田市美術館

お名前	様	ご所属
Tel		Fax
e-mail	必要な画像の番号	
掲載紙／メディア名	発売、放送予定日	月 日(月号、vol.)
必要な鑑賞券枚数(最大5組10名分)	枚	鑑賞券の送付先

*読者プレゼントのため等、希望する場合のみご記入ください



1



2



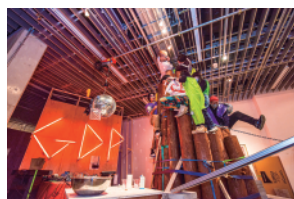
3



4



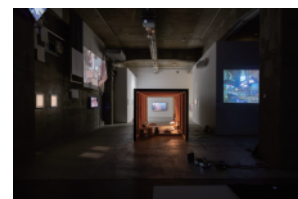
5



6



7



8

1. ポール・シニャック《ポルトリユ、グールヴロ》1888年 ひろしま美術館蔵
2. ラースロー・モホイ＝ナジ《アスコナのオスカー・シュレンマー》1926年 東京都写真美術館蔵
3. アスガー・ヨルン《甘い生活II》1962年 ヨルン美術館蔵 ©Donation Jorn
4. 集団行為《第3案》1978年
5. マルガレーテ・ラスベ《明日も、明日も、そしてまた明日も、彼らをスイングさせよう》1974年 Courtesy of the Galerie Molitor und Deutsche Kinemathek
6. dot architects + contact Gonzo《GDP(Gonzo dot party)》アートエリアB1 2020年 photo: Ryo Yoshimi(参考図版)
7. オル太《耕す家:不確かな生成》2022年 撮影:加藤甫(参考図版)
8. 大木裕之「アブストラクト権化」展示風景 ANOMALY東京 2024年 撮影:村田冬実 ©Hiroyuki Oki, Courtesy of ANOMALY(参考図版)

資料の使用には以下の点にご注意ください。

- ・作品写真のトリミング、文字のせはご遠慮いただき、所蔵先、クレジットも表示してください。
- ・ご紹介いただく場合は、情報確認のためお手数ですがゲラ刷り等をお送りください。
- ・情報掲載後、献本または情報公開後の報告をお願いします。
- ・本展の紹介でのご使用後は、各メディアの責任のもと画像データを削除破棄してください。

美術館使用欄 画像提供の依頼日 年 月 日 ☐画像送付 ☐校正 ☐修正 ☐配信・配本